

まえがき

時は流れ、時代は移ろい、世のものごとを取り巻く状況は変わるが、ものごと自体がもつ本質は変わらない。変わるのは、ただ相互の関係性であるように思われる。

このことは、学問の分野そして本書で対象とする水環境工学にもそのまま当てはまるのではなかろうか。変わるのは、グローバル化による世界のありようと地球環境まで広がる視点からの問題の枠組み、そして発展する技術とシステムである。変わらないのは、水や空気という物質あるいはそれから構成されるもの、そして技術の基礎となる科学的原理である。

ところで、「21世紀は水の世紀」などと水の重要性を強調する言葉が最近よく聞かれる。しかし、歴史を振り返れば、世界の四大文明はいずれも水とともに興ったのであり、古代ローマ文明は水道技術に見られるよう土木技術に秀でた文明であった。水は遙かな歴史の流れのときどきで人の生活とともにあり、それぞれの時代、地域で重要な役割を果たしてきた。将来のあり様がおそらく異なるのは、地域的偏りをともなう今後の人口増がこれまでにないほどの圧力となって、しかもそれは化石燃料とは異なる影響の仕方世界に押し寄せてくるからであろう。

したがって、現代のテキストが備えるべき内容は、変化しない学問の真理を正確にそして余すところなく体系化して示すことと同時に、変化する事柄を適時に取り込んで伝えることと思われるのである。

従来、水質工学や水処理技術などに関する大学または技術者向け図書は数多く出版されている。そのような中で、本書は『水環境工学——水処理とマネジメントの基礎——』と副題をつけて書名とした。そのおもいは、時代や状況が異なっても変わらない水の科学と、社会の移り変わるニーズへの的確な対応が要求される工学とを二つの幹として、さらに水をマネジメントする視点を組み込むことによって、テキストとしての新しい方向性を示すことである。本

まえがき

書を企画した意図は、多くの広がりをもつ水環境工学を今の視点で束ねたい、そして単なる水質工学、水処理工学ではなく、実社会に役立つ総合工学としての新たな水環境工学を提示したいと考えたことにある。

本書の購読層は、学部専門課程から大学院博士前期課程で水環境工学を学ぶ学生諸君、水環境工学を今の視点で改めて学ぼうとする技術者をはじめ一般社会人の方々と想定している。そのような言わば“若い”読者層にどのような反響をもって本書が受け入れられることとなるか、読者の方々から是非とも貴重なご意見を双方向的に頂戴したい。

最後に、本書の執筆に種々労をおとりいただき、遅れがちな執筆を辛抱強く軌道にのせていただいた共立出版(株)編集部の石井徹也氏に感謝する。

2010年10月

著者を代表して 川本克也